

▼ガビン先生と楽しく学ぼう！

「日本の古典文学 恋」

＋ちょっと ウラ話 (全4回)

6月7日金、8月2日金、11月22日金、
令和7年1月31日金／内容＝恋愛から
見える人間模様／講師＝伊藤 雅敏先生
／対象＝市内在住者／定員＝30人
(申込順)／申込＝4月17日金9時か
ら電話にて (土日は17時まで)



共済会総合市民センター

令和六年六月七日(金)
十時から十一時三十分

その一

へ恋愛から見える人間模様

＋ちょっとウラ話

日本の古典文学 恋



ガビン先生と

楽しく学ぼう！



次嶺經
山背道乎
人都末乃
馬從行尔
己夫之
步從行者
每見
哭耳之所泣
曾許思尔
心之痛之
垂乳根之
母之形見跡
吾持有
真十見鏡尔
蜻蝕領布
負並持而
馬替吾背

つぎねふ「万葉集」②
やましろぢを
ひとづまの
うまよりゆくに
おのづまし
かちよりゆけば
みるごとに
ねのみになかゆ
そこおもふに
こころしいたし
たらちねの
ははがかたみと
わがもてる
まそみかがみに
あきづひれ
おひなめもちて
うまかへわがせ

つぎねふ

山背道を

他夫の

馬より行くに

己夫し

徒歩より行けば

見るごとに

音のみし泣かゆ

そこ思ふに

心し痛し

たらちねの

母が形見と

我が持てる

まそみ鏡に

蜻蛉領布

負ひ並め持ちて

馬買へ我が背

山背の枕詞、活用語の連体形

つゝ古事記に「つぎねふ」つぎねをぬし

山背を通っている道

山城

既婚女性が他人の夫をさうていう

枕詞

同書記

枕詞 呪ねをもた

特別な言葉

← 柳本八郎(讃美大表現)

のみこ強め

ゆこ自発

そここその点り夫が馬を持てなため

徒歩で行く

母の枕詞

形見こ思ひ出の品

遺品とは限らな

まそみこますみしよまそみしよまそ

真澄

とんぼの羽のように薄く透き通った領布

アキツミとんぼの古名

ひれ

袋の棒などを用いて肩に担ぐ

買ふの命令形

替ふは換行為から

商行為↑ 飛達した

つゝふ

（枕詞）

卷十三

3314

④

山背道を

山城道

他夫の

よその主人は

馬より行くに

馬で行くに

己夫し

わたしの夫は

徒歩より行けば

歩いて行くので

見るごとに

見るたびに

音のみし泣かゆ

泣けてきます

そこ思ふに

それかと思うと

心し痛し

心が痛みます

たらちねの

（枕詞）

母が形見と

母の形見に

我が持てる

わたしが持っている

まそみ鏡に

ます鏡に

蜻蛉領布

蜻蛉領布を

負ひ並め持ちて

合わせて負ひ持っています

馬買へ我が背

馬をお買いなさい あなた

つぎねふ

秋詞

数多く続く峰々 手をつなはる(母子)(夫妻)
つぎねの生えている所
セリヨ科セリヨ属 千両

↑ 20 30 ↓

月花
奈白
日本各地



4月5月に咲く

「二人静」静御前が一人で舞う姿

吉野静・吉野御前 (眉掃草)

吉野山に舞う

「二人静」田植する時期に道端に咲く

早乙女花 雲が乗り移る二人で舞う姿

「謡曲」静御前の霊とその霊にとりかかれた葉摘

6月7月に咲く

山北月

1794 延暦13 十一月八日

桓武天皇が平安京命名の際に山城国に改称

山河遠なり自然の城のようになす形

奈良山のうしろ 山代国 山城国

他夫

ひとづま
他人の夫

又

つま 禮端妻夫

妻

「つま」と呼んだ

女房の端つに
妻屋を建てて
夫が通ってくる

己夫

おのづま
自分の夫

男は同様に何人もの妻へ通う
魏志倭人伝「其俗国大人皆四五婦」

下戸惑二三婦

婦人不淫 不妬忌

馬四頭へ

738 (天平10) 頃

馬一頭 1180 束 450 束 (平均 280 束)

1 束 11 米 5 升 (1 升は現在の 4 合)

馬一頭 280 束 11 米 840 kg の代金

「延喜式」 細馬 (良馬)

巻 26 主上

中馬 (並)

下馬 (貧馬)



(現代) 30 kg 11 / 万円 ↓ 28 万円

(当時の収穫量 1/10) ↓ 280 万円 300 万円前後

蜻蛉 ^{あきづ} 秋に多くいづる 11 曲 豊作

刈る前の田に群れ飛ぶ

日本書紀 神武天皇

山上から国の形を望み見る

← とんぼが交尾しているように山々が連なるという国
蜻蛉島「あきづしま」と名付ける

穀豊 繁殖力の強く五穀豊稔の予呪

古事記 雄略天皇

狩りをしている時 腕にかみつこうとした蛇
とんぼが食いついて飛び去った

霊

祇園精舎ノ鐘聲

⑦

諸行無常ノ響アリ

祇園精舎の鐘の聲

娑羅雙樹ノ花ノ色

諸行無常の響きあり

盛者必衰ノ理ヲ示ス

盛者必衰のこころをあらわす

驕ル人モ久カラズ

おこる人も久しからず

只専ノ夜ノ夢ナリ

唯春の夜の夢のごとし

極キ者モ終ニホロフ

たけき者もつひにはほろぶ

偏ニ風亦ノ塵ニ同

ひとへに風の前の塵に同じ

文禄本 平家物語

「譲てほしい」
スダダ(富家)

身寄りのない者たちに
食事を給し施していた
土地を金銭で埋めたい譲てやろう
本当に埋めてまた (まわごと)
土地を譲渡 十樹木を寄付
十寺院建設を寄付

祇園精舎の守護神
「牛頭神(びすのかみ)」
別名「祇園天神」
祀る祇園神社
八坂神社 天王神社
八坂神社の祭礼
「祇園祭」
疫病神を鎮めた

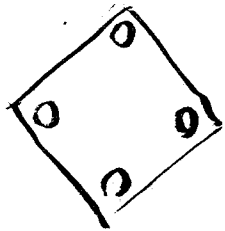
ぎじりぎじりおん
祇園給孤独園

へこの寺でブダダが説法

祇園精舎の鐘の聲

往生要集 源信僧都

「祇園寺の無常堂の四の隅に頗梨の鐘あり」



はり 七宝の一つ
頗梨 水晶でできた小型の鐘がラス
水晶の鐘

風鈴のような鐘

修行していた僧が病気になる
鐘の音を聞いて苦悩が除かれた

「諸行無常 一切万物は
是生滅法 生滅流転して
生滅滅已 止まることか
寂滅為楽」 ない

はり
玻璃